活動がうまれる「場」をつくる

NPO法人 CoCoT

復興につながる場づくりの記録

平成25年4月

はじめに

復興支援活動で「場」を創る
――活動がうまれる場づくりへのチャレンジ――

NPO 法人コミュニティ・コーディネーターズ・タンク CoCoT
復興支援担当コーディネーター　円居の場プロジェクト担当
谷口　起代

「復興支援活動で『場づくり』をしている」と話すと、概ね、人は、いつでも立ち寄れるサロンのような場をイメージする。しかし、NPO 法人 CoCoT が 2012 年度に行った「場づくり」は、数か月に１回の「円居の場」という不定期な集いの開催であった。2012 年度の事業の締めくくりに、今回、CoCoT が開催した形態の「場づくり」の意義と成果をあらためて考えてみたい。

「円居の場」とは、「震災を経て表面化した問題、震災からの再生といったテーマを、関心のある者同士が集まって、聴き、語り、考え、表現する場」として、その時その地域にふさわしいテーマを選び、選んだテーマに合ったゲストを招いて集う場である。2012 年度はいわき市で２回、松戸市で５回、南相馬市で１回開催した。テーマは、主に、被災者や避難者と直接に関わることが多い支援活動や地域活動の実践者との会話から抽出した。その結果、いわきでは支援者が直面している課題を取り上げ、松戸では福島の生の声を聴き共に震災関連の不安や疑問を語り、南相馬では日々の生活から一旦離れ、自分自身に向き合う機会を提供する場となった。(p.2 p.4 参照)

通常、この種のイベントは、参加者の満足度や学びの深さで成果が評価されがちである。しかし、震災後の復興支援活動における「場づくり」においては、イベント内容と並行して、そのイベントを開催することで、その地域の復興に向けて、どのような可能性が生まれたかが重要だ。「円居の場 in いわき」の開催には、その企画に協力するという名目で定期的に支援者が集う会合があった。そこは、支援者同士が普段の活動の場で置き去りにしがちなテーマを真剣に語り合い、その議論を通して互いに知り合う場でもあった。いわば、企画の場自体が、関係性が構築される場として機能していた。そして、イベント当日は、企画に関わった者にとって、同じような問題意識――まちづくり・コミュニティ創造といった関心――を持つ述べ 40 名程のそれぞれ現場を持ち活動をしている仲間に新たに出会う場となっていた。「円居の場 in まつど」からは、被災地出身者と共に活動するボランティアグループが誕生し、メンバーの出身地である南相馬市でのワークショップを企画・運営するに至った。

このようにしてみると、NPO 法人 CoCoT が行った復興支援活動における「場づくり」は、地域活動の担い手間のリアルな関係性、地域を動かす原動力となるような関係性を構築する「場」＝「土俵」を創ることであったと言い換えられる。本年度は、その土俵にこれからの復興の担い手がのり、これまでは孤独に点として存在していた者同士が知り合うことができた。その中には、すでに共に活動を始めるに至った者もいる。次年度の課題は、この「円居の場」という土俵に芽生えた可能性を、いかに育み、成長させ、具体的な動きへと、そして継続的な動きへと展開することができるか、出会った者同士が協働できる仲間となりえるかにあるだろう。

地域の活動者の点と点を結んで
若い復興の担い手による座談会

震災から1年後の2012年から、CoCoTでは、復興支援センター小名浜を拠点とした準備会合を開き、企画イベント「円居の場 in いわき」を開催してきました。「震災がなければ今、いわきにはいなかった。震災で大きく人生が変わった者同士話してみよう」という声掛けで8月の第1回目の会合がスタート。その後、月1回の会合を継続してきました。今回は、これまで参加してくれた若い地元支援者との8カ月間を振り返りました。（司会・谷口起代）

第1回目会合の衝撃

谷口　8月20日に初会合を開いて、それをメヒカリ会合と名付けて月1回の会合を続けてきました。自己紹介と課題出しで5時間も語り続けた初回の会合の記憶は、私にとって、今でもとても鮮明で、「ここにテーマあり！」って思ったことを覚えています。「ここにある若者たちの動き、感性を殺しちゃいけない」、大げさだけど「復興ってここから始まる！」という感覚を持ちました。皆さんにとっては、あの日はどんな日でしたか。

鵜沼　自己紹介でいわきに戻って来てからの動きを話したとき、それまで振り返ることがなかったので、短い期間にいろいろなことがあったんだなと気付きました。震災直後から動いてきた人たちはそれ以上にいろいろなことがあり、本当に大変だったんだと頭が下がる思いをしました。

会田　夏、鵜沼君から「東京から震災を契機に帰ってきた若い人たちで集まって、いろいろ話をするんだけどどう？」と誘われて、面白そうだなと参加しました。内容もわからずに来て、いわきの今抱えている問題や課題を皆でポストイットに書いて色分けしたんです。思い返すと、そうやって出てきた課題を整理したことで、8月以降、自分で動く上でいろいろと参考になりました。

谷口　いわきで活動している自分自身の課題がピンク、いわきの課題が水色、という感じでね。「でも混ざっちゃうよね」とか言いながら。

東川　震災に対するもやもやとした思いを自分の中で気付いていても、皆でそれをしゃべり合うことはあまりなく、具体的な話で日々精一杯だったので、皆でポストイットに気持を書いてボードに貼ったら、木になるぐらいたくさんの気持ちをシェアできたのが楽しく、新鮮だったです。

内山　いろんなもやもやがあって、いろんなことを感じながら活動していても、改めて文字にしたり話をする場ってなかったから、考えていることを言葉にしてみたら、みんな共感することがいろいろ出てきて、楽しい場になっていました。おそらく近いことを考えていた人がいた、という一つの安心感があったんですね。仲間がいた、という。自分だけこういうことを考えていたんじゃないんだ、という感じ。

鵜沼　同世代だけで集まって自分たちの考えていることを出す場がなかったから、同じようなことを考えてるということにある種の安心感を得られましたね。

内山　ワークショップでの課題出しというと健全な課題が中心で、皆、心の奥深くの気持はなかなか出せなくなっちゃう。8月の会には表面上のことじゃなくてもっと掘り下げなくちゃっていう空気がありました。

谷口　「いいことしようとしているようなうさんくささ」なんていう、普段は語れないような気持にも、皆が共感し合ってて、やっぱり会議では語れないことがいっぱいあるんだなあって思いました。何かを決めるための会議ではなく、ここは小さな集まりだったから、より本音に近いものが出せたと思います。帰り際に、参加者から「またやってください」って言われたのがとても印象的で、またやっていいんだと思いました。

内山　ごはんも食べずにずっとしゃべってたんだもんね。

全員　でも全然気にならなかった（笑）。

東川　たぶん年代が近いから、気軽に話せたんだと思います。年配の人がいると、大抵自分なりの答えを持って活動してきた人が多く、こうだと言われたらそれ以上言えなくなってしまうから。

それぞれの活動を終えて集まった座談会

会田　それと、何かのテーマで話しましょうと言うとき、通常はあらかじめこういう方向で、という本筋が決まっていて誘導されがちですが、それが一切なかった。本当に自由にそのままを出し合って整理することができた場だったから、熱中できたんだと思います。

谷口　私も真剣だったけど、皆もとっても真剣だったんだよね。こんなに真剣な若者の思いを萎えさせてしまったらいけないと思った1回目だったんですが、楽しかったね。

話せる場があったことに、どんな意義があったか

鵜沼　月1回の会合は、会議とお茶会の中間の、かしこまらないけど真面目な話をするというところが新鮮でした。そして、同じような課題に取り組んでいる仲間とざっくばらんに情報交換できる貴重な場でした。

会田　近い年代同士で、ありのままの気持ちを出していって整理するという、とても生モノ的な場になっていたのがよかったのだと思います。それと、主催が地区の既存の会のような歴史がある会ではなく、完全に外からいわきに入ってきたココットが、客観的な立場で主催してくれたこともよかったのだと思います。

楽しく話す内山さん(左)と会田さん(右)

谷口　しがらみの中にいなくて、勝手にいなくなるからこそ、集まった皆もここで言ったことが別の場所で洩れる心配がない(笑)。そこに県外組織の良さがあるのかなと、今、気付かせてもらえました。

東川　いわきで根を張って活動している会の主催だったら別な気遣いをしなくてはいけない気がします。ざっくばらんに話せる場を作ってもらってよかったです。

谷口　それは具体的に次につながったりしたのかな。

東川　たぶんしがらみなくしゃべれる年代の人が近くにいるってわかっただけでも、自分の考えがもっと深くできたり、がんじがらめになったときのスイッチの切り替えになったと思います。

内山　ここに集う人たちは、それぞれが活動をしていて、ばらばらだけど同じようにいろんなことを考えているから、難しいことを考えずに物が言えて、共感してもらえる。友達だったら大変だねで終わってしまうから。

会田　状況を理解してもらえるのは、ある程度のバックボーンがある人たちが集まったことも大きいですね。

谷口　知りあってまだ8か月の、きっとこれからもお付き合いしていく私たちだけど、みんなそれぞれ日々の活動では孤独だったからね。こういう会話ができる場があるって知っただけでも、活動自体のしんどさは変わらなくても、気持ちは楽になる、ということを言ってくれてるのかな。

会田　友達同士だと、愚痴や慣れ合いになって生産性がまったくない。ストレス発散だけならそれでいいけど、ここだと、次の企画につながっていきます。

谷口　生産性という言葉が出てきたね。皆のあの時の真剣さに触れて突き動かされてしまったからこそ、この企画(円居の場 in いわき第1回と第2回)が生まれたんだよ。

会田　あまりにもジャストミートな企画と思って興味を引かれたんですが、それは自分たちがこういうことが問題だよねというのを出してそこから生まれたんだから、ジャストミートしているわけだったんですね！

円居の場は、今の活動につながっているか

谷口　みんなにとっての円居の場はどんな場所でしたか。

東川　ざぶとんでの車座がいいです（笑）。場が和むし、初めての人同士なので、のんびり話せてよかったです。

鵜沼　円居の場1回目では、復興や地域活性のために動いたり考えている人達が集まったと思います。初めて会う人、うわさだけは聞いていたという人とも、円居の場をきっかけに出会えて良かったです。皆それぞれの形で行動していて、いろいろな関わり方があるんだなと視野が広がりました。アンケートでは良い感想が多く、企画に少しばかりながら関われたことは嬉しかったです。

谷口　アンケートでは、震災後に爆発的に増えた活動者のコミュニティが、このようにあるのはいいものだ、という人、個々に動き出した人たちがつくるコミュニティネットワーク的なものだと書いてくれた人もいました。

会田　自分にとっての一番の収穫は12月の座談会です。コミュニティ活動と経済活動との関係について当時悩んでいましたが、結び付けても悪くないんだという空気に触れられて、踏ん切りがつきました。

東川さん（右）と司会の谷口スタッフ（左）

内山　私はあの空間がよかった。いわきに来て、こうやって人が集まって、話がし合える空間がうれしいなあと。同じ団体内だったら言えないことも言えて、力を抜いて計画を考えたり。それは答えを導き出すという会議ではなかったからこそだと思います。何かを決めなきゃ、というのがない場って深まるんだなと思いました。

谷口　いわきにずっと暮らしている内山さんにとっても、あの空間はうれしいというくらい他にはない、何か違うものを感じてくれた？

内山　はい。いわきで活動する人は点と点では知っていて

● 「円居の場 in いわき」 開催までのスケジュール ●

日	内容	
2012/8/20	初顔合わせ：メヒカリチーム（円居の場企画チーム）誕生	課題出し
2012/9/14	メヒカリ会合	課題整理
2012/10/10	メヒカリ会合	課題整理
2012/11/15	メヒカリ会合	第1回座談会企画
2012/12/13	円居の場 in いわき　第1回座談会	コミュニティ活動と経済活動をつなぎ合わせる～哲学者内山節氏とともに考える、ふくしまから創造するこれからの社会～
2013/1/24	メヒカリ会合	第1回座談会の振り返り　第2回ワークショップの企画
2013/2/23～24	円居の場 in いわき　第2回ワークショップ	コミュニティに「聴く」力を取り戻す 井戸端ワークショップ＆身体で聴くワークショップ
2013/3/18	メヒカリ会合	2012年度の活動の振り返り

も皆で集まることはなく、情報交換の場があるといいよね、と話は出ていましたが、実際にそういう場は作れなかった。円居の場は、ごく一部が集まった会ではあったけれど、話ができることがわかってうれしかったです。

谷口　座談会もワークショップも、専門職、若者、年配の人、分け隔てなく横につながれて、一緒になって考えたり、ケタケタ笑いあったりできて……他にはない平らなつながり方ができる場になってて、楽しかったね。

この経験を、これから活動にどう生かしていくか

谷口　震災から2年、皆さんの今を聞かせてください。

会田　ここでやったことを自分なりにアレンジして、出会える場を作っていきたい。何かを決めるための会ではなく、活動している人同士が触れているだけで、確実に物事が生まれていくということが今回わかったので、今度は自分でと思っています。今、いわき駅のすぐ近くで、高齢者向けの衣料品の販売をしていますが、2、3階と1階の一部を有効活用したいと思っています。1階は展示、2階は演劇や写真、3階はしゃべってそこから何かを生み出す場所に整備し、いろいろなジャンルの人がその場を利用して、ときには違う種類の人同士が顔を合わせて化学反応が起きることを楽しめたら面白いかなと。

谷口　かなり明確ですね。ソフトの部分に関してはいくらでも相談してね。東川さんはどうですか。

東川　今、泉に事務所があり、若者たちが3カ月間共同生活をしながら、里山や環境保全の活動をしていますが、そのプロジェクトをいわきでもやるために、フィールドに近い三和町に引っ越す予定です。今週から6人の大学生が来て、地域の活動をしていく予定です。東京や、遠くは佐賀から来る人もいて、福島ってどういうことになっているんだろうとか、復興支援をしたいという意欲ある人が集まると思いますが、きっと思い描いていることと作業は違うかもしれない。そこをうまくすり合せるには、円居の場のようにゆるやかな場を活用して、イメージをほぐしていきたいと思っています。

鵜沼　みんぷくでは、これからNPO法人化され、ますます活動が活発になると思います。被災地では変化が多くて、長期的に見ることは難しいですが、今自分にできることを精いっぱいやろうと考えています。

谷口　被災地は変化が多く、ニーズも刻々と変わる。その辺良くわかってないと目にみえる、わかりやすい安易な支援に流れがちで、それが被災地に迷惑になることもある。これって、震災に関わらず、支援の領域の永遠のテーマだよね。

内山　神戸、新潟と震災がある度に、分かりやすい支援に皆行くという同じ繰り返しをしていると思います。今回は原発があって、今までの震災とはまったく形が違うのに、今までと同じものを皆持ってきて、撤退して、そして残された住民はどうするの、となってしまう。私も、以前から震災に関係なく、日本の地域でいろんな人が交じり合う場を作りたいという気持ちがありましたが、どこから何をしたらいいかわからなかった。今回の企画では、その一つの形を体験できたと思う。今後、自分がどこで何をやっていくのかはまだ見えないけれど、いろんな人たちが入って混じっていく空間づくり、場づくりはやっていきたいです。

谷口　まじりあう所に何かを見ているんだよね。

内山　「地域福祉」の領域に、もっと地域の人が関わりあえたらと思う。私はこれまでの活動で、海外では普通のこととして見てきましたが、日本だと高齢者、障害者、と分けていることに違和感を感じます。地域の見守り、支え合い、気にかけ合いを復活させたいなと感じます。

谷口　分けられてしまったものをもう一回、混ぜていくことが、これからの地域作りにかかせない課題ですね。

（2013.3.18　小名浜事務所にて）

座談会参加者プロフィール

■会田 勝康（あいた かつやす）
平3町目商店会所属。震災直後、故郷いわきに戻り救援活動を開始。現在、家業を手伝いながら、いわき駅前地区での場づくりに取り組んでいる。

■東川 さゆり（あずがわ さゆり）
NPO法人トチギ環境未来基地いわき拠点担当スタッフ。2011年6月以降、災害救援でいわき市に入り、2012年1月からいわき拠点専従として活動。

■鵜沼 英政（うぬま ひでまさ）
震災当時は東京で生活。2012年1月より、故郷いわきに戻り、NPO活動に参加。2012年7月より、3.11被災者を支援するいわき連絡協議会（みんぷく）事務局スタッフ。

■内山 智子（うちやま ともこ）
震災直後にNGOのスタッフとしていわき市に入り救援活動に参加。2012年8月より、円居の場プロジェクトの現地担当として企画に携わる。

■谷口 起代（たにぐち きよ）
NPO法人コミュニティ・コーディネーターズ・タンク（CoCoT）
復興支援担当・円居の場プロジェクト担当コーディネーター
立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科博士後期課程2年

（座談会不参加だったメヒカリメンバー）

■天井 優志（あまい ゆうし）
震災直後からいわき市内で救援活動に参加。現在、ふうあいねっと（茨城県内への避難者・支援者ネットワーク）の事務局スタッフ。

■吉田 慶（よしだ けい）
震災直後から岩手県で救援活動に参加。その後、NPO法人遠野まごころネット事務局広報部長　全国支部統括責任者として活動。現在　同法人の東京事務所所長。

■小笠原 隼人（おがさわら はやと）
被災地での活動を志し2012年8月に東京から郡山へ転居。現在、チャイルドラインこおりやま事務局長。

「円居の場 in まつど 被災地との絆

NPO 法人 CoCoT は、2012 年度に「円居の場 in まつど」を 5 回開催した。そして、この「円居の場プロジェクト」からボランティアグループ「チーム・コォラク」が誕生し、メンバー 1 人の出身地である南相馬市で第 1 回目の円居の場を企画・運営した。こうして、今、南相馬市の人々との顔のみえる繋がりが築かれ始めている。

「円居の場 in まつど」のあゆみ

チームコォラク企画運営

1

「3.11 震災後の暮らしを考える若者たちの集い」
日時：2012/8/12（日）13:00～16:00
場所：まつど市民活動サポートセンター
ゲストスピーカー：
三原由起子（浪江町出身 歌人）
新妻孔太（楢葉町出身 デザイナー、絵描き）

学生ボランティアさんと企画

2

「被災者・避難者・支援者の枠組みを越えて語り合おう」
日時：2012/12/17（月）11:00～13:30
場所：蔵のギャラリー・喫茶 結花
ゲストスピーカー：高田けいこ
（南相馬市市民団体支援ブース「コォラク」）

第1回に参加者として駆けつけた南相馬出身の高田さんがゲストスピーカーに

円居の場 in まつどから、チーム・コォラク誕生

3

「松戸でやれる被災地支援チームビルディングワークショップ」
日時：2013/1/29（月）10:30～13:30
場所：ごちゃＳｔｕｄｉｏ
進行：チーム・コォラク

この後、南相馬市へワークショップを届けるプロジェクトがスタート

4

「震災復興応援キャンドルづくりワークショップ」
日時：2013/2/4（月）10:30～12:00
場所：蔵のギャラリー・喫茶 結花
講師：高田けいこ
（チーム・コォラク代表）

5

「きくみるはなす縁坐舞台ワークショップ～身体をひらき、心をひらき、そして、響き合う～」
日時：2013/2/25（月）10:30～16:00
場所：天真寺
講師：橋本久仁彦氏（きくみるはなす縁坐舞台村塾主宰）

6

「小池博史ブリッジプロジェクト自分再発見ワークショップ」
日時:2013/3/29（金）-31（日）
場所：銘醸館（南相馬市原町）
講師：小池博史
（舞台芸術の学校（P.A.I）学長）

南相馬市で開催！

大切なことは、風化を防ぎ、震災・原発事故に「向き合い、つながり、共に歩む」人の輪を広げていくこと

「円居の場」は、震災を経て表面化した問題、震災からの再生といったテーマを、関心のある者同士が集まって、聴き、語り、考え、表現していく場として、NPO法人CoCoTが、2012年度の復興支援活動の一環として福島県いわき市と千葉県松戸市で開催しているものである。直接的な被災地ではないがホットスポットである松戸市で、「円居の場」を開催した目的は、被災地の生の声を伝えること、そして、その企画に多くの人が関わる仕組みの構築を通じて、風化を防ぎ、震災・原発事故に「向き合い、つながり、共に歩む」人の輪を広げていくことであった。つまり、県外支援ネットワーク形成に向けて、関心を持つ者たちをつなげ、自ら活動する者を育て、その活動を支援していくことである。

第1回には、ボランティア学生2人が企画から関わった。彼らは、自らゲストスピーカーの出身地の情報を集め、当日は学生仲間を招集し、共にゲストスピーカーの話に聴き入り、今、起きていることの深刻さに向き合った。企画終了後には、今後もこのテーマに向き合い続けていくと語ってくれた。

第1回円居の場inまつど企画ミーティング終了後の学生ボランティア

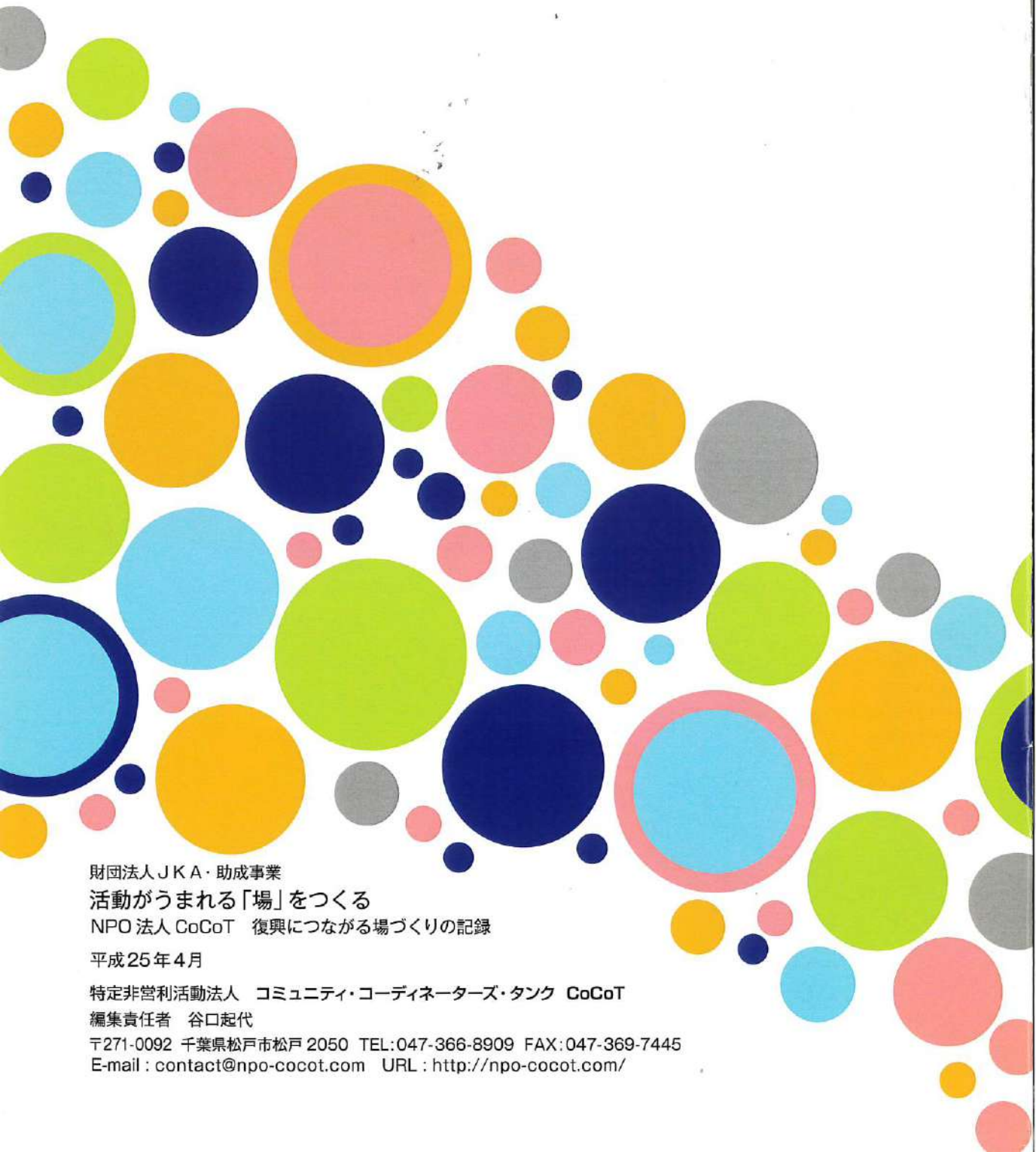
第5回円居の場inまつど「きくみるはなす縁坐舞台ワークショップ」

第4回円居の場inまつどキャンドルづくりワークショップ

第3回、第5回、第6回（南相馬）は、「円居の場プロジェクト」から誕生した、「チーム・コォラク」が、企画と当日の運営を受け持った。「チーム・コォラク」は、被災地支援に関わりたいと思いつつもこれまで関われる機会がなかった者と、南相馬からの自主避難者で構成されている。「円居の場」の企画準備を被災地出身のメンバーとこれまで被災地を訪れる機会がなかったメンバーが共に行い、真剣に意見交換をする過程の中で、メンバーひとりひとりの中に、確実に被災地を知る作業と向き合う作業が進んでいる。このように、当初、NPO法人CoCoTのコーディネーターが主体となって、被災地ではない地域での復興支援の場づくりとして行ってきた「円居の場」は今、多くの者を巻き込み、震災・原発事故が投げかけた課題に静かに関心を持ち続けている人々が関われる機会を創りだし、自ら活動する者を生み出し、被災地とつながり向き合う者の裾野を広げている。

新たなボランティアグループが誕生するなど、「円居の場」は、自ら活動する者を生み出し、被災地とつながり向き合う者の裾野を広げている

チーム・コォラク南相馬出発前日ミーティングにて



財団法人ＪＫＡ・助成事業
活動がうまれる「場」をつくる
NPO 法人 CoCoT　復興につながる場づくりの記録
平成25年4月
特定非営利活動法人　コミュニティ・コーディネーターズ・タンク　CoCoT
編集責任者　谷口起代
〒271-0092 千葉県松戸市松戸 2050 TEL:047-366-8909 FAX:047-369-7445
E-mail : contact@npo-cocot.com　URL : http://npo-cocot.com/